

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00626

研究課題名(和文) 中世漢字片仮名交じり文における重点を中心とした書記史的研究

研究課題名(英文) Characteristics of Japanese Writing in a Historical Perspective: Focus on Marks of juten in Medieval Japanese Kanji-Katakana Mixed Script Texts

研究代表者

村井 宏栄 (MURAI, Hiroe)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：40610770

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：中世漢字片仮名交じり文において同仮名の連続は、多く補助符号たる重点(「、」)を以て示される。本研究では次に示す文献群を取り上げて重点用法を検討した結果、次の結論を得た。(1)親鸞遺文においては自立語語頭では同字反復を、同語中尾では重点を用いる傾向が認められ、分節機能と一貫性の高さを評価できる。(2)大福光寺本『方丈記』では文位置に関わらず重点が多く用いられ、(1)とは全く異なる傾向を指摘できる。(3)漢字 仮名比率、重点状況、仮名遣いの3点について検討した結果、観智院本『三宝絵詞』においては(1)(2)と比するに方針の徹底は認めがたいが、代わりに仮名大小の対立が分節機能を補助している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、平仮名文献の世界では、13世紀頃から語頭における重点の使用が次第に姿を消し、このことは異体仮名の使い分けを促進させる契機となったと論じられてきたが、片仮名文献における重点用法の実態については注目されてこなかった。親鸞関連文献の同音連続においては、徹底的に文節頭は同仮名反復し、逆に大福光寺本『方丈記』においては位置によらず同仮名反復を避けて重点を用いるという用法実態を実証的に示したことなど、今後の中世日本語書記史解明への発展が期待できる。

研究成果の概要(英文)：In medieval Japanese kanji-katakana mixed script texts, the repetition of the same kana is indicated using an iteration mark (、). In this study, several literary documents were examined to analyze the use of iteration marks, and the following conclusions were drawn. (1) The writings of Shinran tend to use a repeated kana at the beginning of independent words and iteration marks in the middle or at the end of such words; therefore, these marks appear to have high consistency and segmentation functions. (2) the Daifukukoji Temple Hojoki manuscript uses iteration marks regardless of the position in the sentence. (3) Analysis was performed to examine the Kanchiin Temple Sambo-ekotoba manuscript, including an assessment of the ratio of the kanji to the kana; the status of the iteration marks; and the kana usage. This analysis did not reveal a consistent system as in (1) and (2) but may be of assistance with respect to the segmentation function of majuscule-minuscule kana opposition.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語書記史 中世漢字片仮名交じり文 片仮名文 重点 親鸞遺文 方丈記 三宝絵詞

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

現代日本語における漢字仮名交じり表記は漢字と平仮名を交用させる点に最大の特徴が存するが、文表記にあたっての構成要素は漢字・仮名のみではない。他に、句読点・算用数字・括弧類・くり返し符号などの約物・補助符号も文を構成しており、多くの場合、これら無しに文は表記なされない。上記のうち、くり返し符号(いわゆる「踊り字」「畳字」等、以下「重点」)は日本語史上広く亘って用いられてきたが、戦後、漢字に用いる「々」以外は漸次衰退した。

重点を用いた日本語表記について書記史的に考えた場合、用法の変化は異体仮名の使い分けを齎したとの指摘がなされている。

平仮名文献の世界においては、13世紀以降、文節頭における重点使用の衰退、及びそれに伴う異体仮名の使い分けの本格化が進む。その一方、文中における漢字比率の増加に伴い、漢字表記は分節機能(境界表示機能)の一部を担うようになる。異体仮名の使い分けの本格化及び漢字表記の分節機能の獲得は、中世日本語書記史の展開における重要点と認めることができよう。遠藤邦基「片仮名書き和歌の仮名づかい 平仮名本からの書写の場合」(『国語文字史の研究』14、和泉書院、2014)は、重点の使用について次のように言う。

十二世紀初期の平仮名文献(元永本古今集・伝公任本古今集)では、語句頭においても重点の使用が珍しいことではなかったが、十三世紀頃から重点の使用は次第に姿を消すこととなり、その使用は「こ<sub>レ</sub>ろ(心)」や「かは<sub>レ</sub>(河は)」のごとく文節内に限るようになる。その結果、重点以外の方法を用いての同字連続を表記する必要性が生じたのである。その対策として用いられたのが異体仮名(字母の異なる「し坦・八疏・そ其…」だけでなく、字母が同じで崩し方や筆順の異なる「つ存・お怠・の乃」も含む)を利用した変字法であった。つまり十三世紀は「異体がなの使い分けが本格的段階に入る時期」でもあったのである。

重点が文節頭には用いられないという制約を持ち始めたならば、逆に重点は「非文節頭」であることの標識にもなりうる。たとえば、「おもは<sub>レ</sub>(思はば)」が「おもは<sub>レ</sub>」と表記されることで、重点「<sub>レ</sub>」はその前接成分とのまとまりを感じさせやすく、結果的に重点は分節機能を持つことになる。

今野真二『仮名表記論攷』(清文堂出版、2001、初出は同1996)は『土左日記』写本四種、鎌倉期書写の『源氏物語』写本九〇帖及び室町期書写の連歌書六一文献を調査し、各文献において重点の使用そのものが漸減の傾向にあり、さらに、各文献において語頭位置での重点使用が明らかに減少していることを報告している。また、鄭炫赫「キリシタン版国字本宗教書の重点について」(アクセント史資料研究会『論集』2、2006)は、キリシタン版国字本の宗教書7文献における重点を調査し、文節頭位置での重点使用は非文節頭位置や付属語位置に比してかなり少なく、割合で見ても、今野真二(2001)の調査した室町期書写連歌書における語頭位置でのそれを、さらに下回るとしている。

今野真二(2001)と鄭炫赫(2006)の調査対象は仮名文ないし漢字仮名交じり文である。両者の研究成果における重点は、「平仮名の」重複記号であると言える。しかるに、平仮名に比して片仮名は異体仮名を多く持たず、連綿を前提としない。散らし書き等、美的要素と言える側面も見出しがたい。とするならば、中世漢字片仮名交じり文(いわゆる「片仮名文」を含む)において片仮名の同仮名連続を表記する方法は平仮名文献とどのように異なり、重点はどのように用いられるのか(あるいは用いられないのか)という問題は重要なはずであるが、管見に及ぶ限り、多く取り上げられているとは言い難い状況であった。

## 2. 研究の目的

上記の視点から、本研究は中世、すなわち日本語書記法の多様性が最も拡大化した時期において、漢字片仮名交じり文における重点を調査した。中世漢字片仮名交じり文においては、文は漢字と片仮名の交用によって表記されるが、その際の片仮名は更に大字仮名・小字仮名の区別を認めることができる。言わば三種類の表記種が交用すると言ってよい。加えて、仮名遣いについても、平仮名文献のそれとは異なった様相が予想される。これらと重点使用との関連についても未解明の状況であった。本研究はかかる視点から、平仮名文献の世界において「異体仮名の使い分けが本格的な段階に入」(矢田勉『国語文字・表記史の研究』汲古書院、2012、初出は同1995)とたとえられる13世紀及びその前後期間の漢字片仮名交じり文献を取り上げ、その重点用法について研究するとともに、特に他の分節的要素との関連についても研究を進めた。かかる目的により、中世漢字片仮名交じり文における書記システムの解明を目指したものである。

## 3. 研究の方法

### (1) 作業内容

研究遂行のため、平成30～令和2年度にかけて、主に次の作業を行った。

中世漢字片仮名交じり文献に用いられた書記方法・書記特徴の幅広い調査  
の書記特徴に関わる先行研究の蒐集とその整理

13世紀仏教人として自筆の漢字片仮名交じり文資料が大量に残存する親鸞関係資料の重点  
について、その書記体裁の調査

大福光寺本及び前田本『方丈記』の重点について、その書記体裁の調査

観智院本『三宝絵詞』の重点について、その書記体裁の調査

～ について、調査方法を将来的に多方面の研究に役立てていくため、コンピュータを用  
いたデータベースの作成・用例入力

に基づく結果の解析と、論旨の改善、追加の調査

### (2) 資料の概要

上記期間において調査した漢字片仮名交じり文献は主として下記の資料である。概要を示す。

#### ・親鸞関係資料

13世紀に成立した親鸞遺文は、親鸞自筆の真蹟が多数伝来し、他者の書写を経ていないという意味において、日本語史研究の第一級資料に位置付けられる。親鸞遺文は、漢字片仮名交じり文で記されるものを含み、それらは、多くが片仮名宣命書きを含みつつ、大字片仮名を多く交用させる表記体となっている。『西方指南抄』は奥書によると、康元元～2年(1256-57)親鸞84-85歳時の自筆書写にかかるものである。内容は法然上人の法語・消息・行状等の言行録である。『西方指南抄』は、親鸞遺文資料群において『教行信証』と並ぶ大部の言語量を誇る。他、漢字片仮名交じり文で記された親鸞自筆書写資料として『唯信抄』『尊号真像銘文』(略本・広本)『唯信抄文意』『一念多念文意』を用いた。

#### ・大福光寺本及び前田本『方丈記』

『方丈記』は鴨長明によって1212(建暦2)年に著され、その諸本には広本系と略本系とが知られる。広本系はさらに古本系と流布本系に類別される。大福光寺本および前田家本はともに古本系に属する。大福光寺本は最古の『方丈記』写本であり、漢字片仮名交じりで記されている。夙く山田孝雄(1925)によって「鎌倉時代中期を下らざるものなるべくして」とされて以来、『方丈記』研究の中心的存在とされてきた。大福光寺本に対して最も近い関係にあるとされるのが、

漢字平仮名交じりで記された前田家本である。前田家本は書写識語等を持たないが、尊経閣叢刊の複製解説(1938)は「鎌倉時代末期もしくはそれ以前の書写と見るのが妥当であるやうに考へられる」としており、大福光寺本と遠くない時期に成立した可能性が高い。

・観智院本『三宝絵詞』

『三宝絵詞』は源為憲の撰になり、永観2(984)年に冷泉天皇の第二皇女、尊子内親王に捧げられた仏教入門のための説話集である。主要写本の1本として、文永10(1273)年の奥書を持つ漢字片仮名交じり文で記された観智院本が知られる。

#### 4. 研究成果

##### (1)親鸞関係資料における、重点・同字反復による言語分節機能の高さ

親鸞関係資料(真蹟)においては、研究開始前年度の予備調査で『西方指南抄』の重点について行った報告(『椋山女学園大学研究論集人文科学篇』第49号)と併せ、同書の書記方針が他の漢字片仮名交じり文献にも敷衍できることを示し、重点用法が厳密に統一されており、重点・同字反復による言語分節機能が非常に高いことを示した(『言語と表現 研究論集』第16号)。概して親鸞関係資料においては、文節頭は同字反復によって、自立語語中尾は重点によって記す傾向が強く、書記規範意識の表れと評価できる。3.の親鸞関係資料6文献における重点の使用状況をまとめると下表の通りとなる。

		重点	同字反復	合計
文節頭	自立語語頭	17	126	143例
非文節頭	自立語語中尾	1003	15	1018例
	付属語	124	53	190例
	その他	13	0	
合計		1157例	194例	1351例

自立語語頭は重点使用が17例認められるが、うち16例は「～ノ、チ」の例であって、特定の語連結に偏っており、当時の表記慣習が疑われる(鄭炫赫2006・矢田勉2012)。加えて、付属語語頭においても重点が優位であるものの、同字反復がまま行われている点も注意すべきである。

カノクニニ・ムマレムト・オモハムモ・マタ・マコトノ・コ、ロヲ・オコスヘシ(『唯信鈔』59・1)

御返事ヲ・<sup>オム</sup>申サ・<sup>マフ</sup>サラムコトノ・クチオシク候へハ(『西方指南抄』下本三七・四)

上の例では助詞「に」や助動詞「ず」の未然形「ざ(ら)」がそれぞれ同字反復され、前接成分との境界が標示されている。親鸞書写資料において同字反復は文節境界を示すのみならず、文節内の自立語 付属語境界をも標示しており、述語末や名詞句末の細微な表現にわたって境界標示が働いている。助詞「に」が小字仮名によって記され、「申ス」と「サラム」の間に朱点が差されていることなど、同字反復以外の書記要素も認められる点が注目される。さらに、助詞の種類(単語)ごとに、重点使用と同字反復のどちらに偏るのかという差違も認められた。すなわち、重点使用に偏る助詞「て」に対して同字反復されやすい助詞「に」「と」など、親鸞の単語意識の析出につながる様相も明らかとなった。親鸞書写資料では、重点・同字反復が分かち書きや小字仮名とともに分節手段として機能しており、「オ ヲ」の対立において助詞「を」を除く語頭はすべて「オ」とするなどの独自の仮名遣いとともに、境界標示に寄与し、可読性の向上につながっていると高く評価できる。

## (2)大福光寺本及び前田家本『方丈記』における重点・同字反復の状況

上記4(1)で取り扱った資料は親鸞という宗教的指導者の直筆資料であるが、異なるテキストタイプに注目するという目的の下、『方丈記』大福光寺本と前田家本を取り上げた(『国語語彙史の研究』39)。

『方丈記』大福光寺本および前田家本の重点について観察すると、大福光寺本は同仮名連続の位置に関わらず重点が多く用いられ、同字反復は稀である。すなわち、大福光寺本の重点は文節境界を越える傾向が強く、ほぼ分節機能を有していない。一方、前田家本の重点は自立語語頭に大福光寺本よりも同字反復が多く見られることから分節機能はより高いと評価できるが、例外もまま見られ、方針は徹底されていない。

親鸞書写資料と『方丈記』二本の三者を比較するに、重点・同字反復による分節機能の高い順に親鸞書写資料、前田家本、大福光寺本の順となる。同期の漢字片仮名交じり文献でありながら、大福光寺本と親鸞書写資料とは大きく様相が異なっていると言える。さらに、大福光寺本『方丈記』は青木毅「大福光寺本『方丈記』の本文をめぐる 平仮名本文先行の可能性」(『徳島文理大学文学論叢』24、2007)により、底本よりも前の段階で平仮名文の伝本が存在していた可能性が指摘されている。かかる状況でありながら、大福光寺本と、近しい時期に書写されたと思しい漢字仮名交じり文である前田家本と比較するとき、両者は仮名遣いおよび重点の用法において相異を見せていると評価され、漢字片仮名交じり文生起という表記体転換にあたっての検討材料となりうる。

## (3)観智院本『三宝絵詞』における書記分節方法の評価

観智院本『三宝絵詞』についてその表記手段の分節性を 漢字文節 仮名文節比率、重点・同字反復による分節、 仮名遣い、の3点から考察を行った(第45回表記研究会研究発表会)。結果、漢字 仮名比率は漢字文節 56.8%対仮名文節 43.2%であり、これは中田祝夫(1982)の分類に従うならば「漢字交り文」寄りの「漢字・仮名交り文」となる。重点・同字反復の用法においても自立語語頭において重点使用に集中する大福光寺本『方丈記』や同字反復に集中する親鸞資料など、方針の明確な資料群とは異なり、観智院本は不徹底な状況である。「オ/ヲ」の仮名遣いにおいても同様に不徹底な状況が見出され、概して一貫した方針は見出しがたい。しかしながら、別の手段として、観智院本『三宝絵詞』においては大字仮名 小字仮名という仮名大小の対立が働いていることを指摘できる。同字反復で記される自立語語頭(文頭を除く)28例のうち、直前助詞要素を小字仮名で表記する例が15例見られるなど、重点が出現しにくい環境下も指摘することができる。ただし、格助詞「を」に下接する同音連続を表記する際は「~ヲ+オ...」で表記する例が最も多く見られ、ゆるやかながらも境界標示が機能しており、可読性の向上に寄与していると評価された。

大福光寺本『方丈記』が「オ ヲ」仮名遣いをほぼ「ヲ」に集約しており重点も文節境界を越え、さらに仮名文節比率が高いという点から総合的に見て非分析的・音声連続的であるのに対し、観智院本『三宝絵詞』はより漢字文節の比率が高いものの、重点用法・仮名遣いの両面では不徹底な様相である。しかしながらこれは別要因として大字仮名 小字仮名という仮名大小の対立が大福光寺本『方丈記』よりも確実に働いていることも関係しており、一要素の様相が他の要素によって分節機能を補完するという点を示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 早川厚一・曾我良成・近藤泉・村井宏栄・橋本正俊・志立正知・森田貴之	4. 巻 57-2
2. 論文標題 『源平盛衰記』全釈（一六 巻五 3）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇	6. 最初と最後の頁 1-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村井宏栄	4. 巻 39
2. 論文標題 中世漢字片仮名交じり文における重点（、） 大福光寺本『方丈記』を軸として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』（和泉書院）	6. 最初と最後の頁 153-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村井宏栄	4. 巻 16
2. 論文標題 漢字片仮名交じり文で記された親鸞遺文における重点（、）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語と表現 研究論集	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村井宏栄
2. 発表標題 中世漢字片仮名交じり文における書記分節方法 大福光寺本『方丈記』と観智院本『三宝絵詞』の比較から
3. 学会等名 第45回表記研究会研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村井宏栄
2. 発表標題 中世片仮名文における重点（「、」） 大福光寺本『方丈記』を軸として
3. 学会等名 第119回国語語彙史研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 日本漢字学会編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 漢字文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

福山女学園大学大学教員一覧【履歴業績】 <a href="https://success.sugiyama-u.ac.jp/teacher/index.php?tid=h2011112">https://success.sugiyama-u.ac.jp/teacher/index.php?tid=h2011112</a>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------